

[講演要旨] 「びやく」という土砂災害の事例紹介と分布について

井上 公夫*(砂防フロンティア整備推進機構)・相原 延光(関東学院中高等学校/県立神奈川総合高校地学講師)

§1. はじめに

2013年10月の台風26号による伊豆大島災害の背景となった大島・元町の形成史や土砂災害史を調査(井上, 2014)する中で「びやく」という土砂災害事例を元大島測候所の調査官・田澤堅太郎氏(『火山伊豆大島スケッチ』の著者)より教えて頂いた。

演者らは、関東地震による土砂災害事例を調査する中(井上編, 2013)で、図1に示したように、関東地震による土砂災害の事例とほぼ同じ南関東の地域で多くの事例を収集・整理したので報告する。

§2. 伊豆大島の「びやく」

元町の集落は、延元三年(1338)の噴火により流出した溶岩台地の上に立地する。元町地区の背後斜面には延元三年の溶岩が分布しており、元の谷地形は消され、緩斜面となっている。その上に未固結の火山火砕物崩壊・土石流堆積物が薄く載っている。

明治35年(1902)の土地分類図(辻村・山口, 1936)によれば、元町は海岸部に面した標高20mまでの小さな集落で背後の緩斜面部は「古畑」と呼ばれる耕作地であった。面上部の急斜面部は山林・共有地となっていた。明治41年(1908)の島嶼町村制の施行に伴い、大島は元村・岡田村・泉津村・野増村・差木地村・波浮港村の6ヶ村となった。昭和30年(1965)年に大島は全村合併して大島町となり、元村は元町と呼ばれるようになった。

立木(1961)によれば、「元町集落は以前、新嶼(にいしま)村と呼ばれており、文禄年間(1692~96)に発生した「びやく」により、下高洞から現在地に移住した」と言われている。元町は、1958年の狩野川台風、1965年の大島大火、1968年の割れ目噴火などを経験しながら、元町集落は斜面上部に発達していった。2013年10月に激甚な土石流災害を受けたが、田澤氏が言われるように「びやく」のことをきちんと知って、土地利用計画を立案すべきであった。

柳田(1942初版, 1977)の「伊豆大島方言集」によれば、「びやく」のことが説明されている(藤井2013)。

ビヤク: 崖の斜面

ビヤクガクム: 崖が崩れる

ビヤクガオス: やまざりして、土砂が押出す

§3. 神奈川県山北町の1972年災害とびやく

1972年7月12日の集中豪雨で、山北町三保・清水・共和地区を中心として、激甚な土砂災害(死者・行方不明9人, 流出・埋没・全壊65戸)が発生した。

丹沢の登山家・奥野幸道(2004)は『丹沢今昔』で



図1 関東地震による土砂災害と「びやく」の分布

「ビヤク」のことを紹介している。山北町三保中学校(1972)の『美しい三保の試練』では、中学生・小学生の体験談をまとめている(2014年に廃校)。旧三保村中川の女子中学生は、「...その時一度目のびやくがきた。おじいちゃんのものすごい声を張り上げて父にびやくがきたぞー早く逃げろーと言った。幸いに私の方には来なかったが、同じ場所から2度目のびやくが来た。...」と、7回もびやくと表現している。

§4. 千葉県富津市の「崩下(びやくした)」

村山由佳(2005)は『楽園のしっぽ』で、「びやくがくむ」という現象を説明している。柳澤吉保の『楽只年録』によれば、上総国天羽郡加藤村で「御林一箇所、山崩木倒、田地江砂押込」と記載されている。富津市加藤は湊川北岸の集落で、200m前後の丘陵地からなり、1/2.5万旧版地形図「鬼泪山」(1935年測図)には、山頂部から大きく落ち込んだ地形が存在し、「崩下」「砂押」の小字名が存在する。

§5. 東京都町田市の「びやく」と地名

町田市域は多摩丘陵からなるが、多くの谷内が発達し、びやくが発生したことが地名に残されている。

① 薬師池『野津田年代記』(田中2013, 芳賀2013)

享保十三年(1723)九月の大雨で、薬師池東の金井嶺が「大びやく打」、ここを通る鎌倉街道も崩壊、薬師池の4割が埋った(現在の藤棚のある半島部)。

② 東多摩川4丁目びやく池(成瀬郷土史研究会)

③ 玉川学園駅前花壇(田中2009, 芳賀2013)

芝生谷戸と呼ばれる谷間でびやくがしばしば発生

④ ⑤ 町田市立大ビヤク児童公園

他の事例も調査中です。